

句誌「冬草」主宰

鴉鳴き冬夕焼けの謎増やす

高橋謙次郎氏へのオマージュ

季語に導かれ、俳句は壮大な心象風景を見せてくれる。そこに、画家が飛び込み、その句をキャンパスに写しとらえる。

柏の松葉町で句誌「冬草」を主宰する高橋謙次郎さんが三月一日、取手の病院で亡くなった。81歳。

謙次郎句と、鎌倉の絵画工房・丹庵（にあん）の、日本画家内藤範子さんとのコラボレーション展が開かれたのは、平成十七年の二月、銀座の清月画廊だった。内藤さんは柏に住んだこともあり、俳句の師弟関係があったという。

同年十二月には、市川市の謙次郎氏生家の「和洋菓子店・島村」でも再現されたが、句も絵も堂々と向かい合っていて、楽しい世界に入り込んだような気がした。高橋さんを偲び、そのときの俳句と絵のコラボレーションを思い出した。

俳句と絵との コラボレーション

句を読んで絵を描き、絵を見ては句を詠む



故高橋謙次郎氏



内藤範子さん

鉄塔に寄れば水の香十三夜 ←

ここに掲載した二句に内藤さんが絵を描いたものだが、内藤さんの絵に高橋さんが句を読んだものも多い。そのひとつ！。



雪女鏡の奥にみうしなふ

昨年の十月、高橋句の朗読と、器楽のコラボレーションが行われ、CDになつてゐる。曲に挿入された句が幻想的に呼びかけてくる。平成六年に「あとの月日」という句集を残されている。

まだ枯木ばかりの森よ病む妻に「冬草」二月号には、「狂詩曲」十五句を寄せている。

秋深きこと晩年はことさらにさりげなき別れ落葉の狂詩曲旅もまだ半ばしばしを十三夜

